

「和讃に聞く」

私は親鸞聖人のご和讃の中で、読むと何故か落ち着くご和讃があります。それは正像末和讃の中にある、

浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし
虚仮（こけ）不実のわが身にて 清浄の心（しん）もさらになし

であります。

私は、僧侶としてどうあるべきか。怒りを抑え、悪い行いをせず、欲を抑えて生きなければならないと思っていました。しかし、現実には些細なことで怒り、どうしても欲を追求してしまいます。思い通りにならなくて、身近な人に荒く接し、傷付けてしまうこともあります。言わなくてもいい余計な一言がつい口から出てきてしまいます。

それに、「あれが欲しい、これも欲しい」で生活し、欲しいものが手に入ると、また次の欲しいものが生まれ、それだけに夢中になり、本当に求めるべきものを知らずに生きている気がします。

どんなに怒りを抑えよう、欲望を抑えていこうとしても自分には出来そうにありません。まして清浄の心を自分の力で起こすことも私には出来ません。このような自分のあり方は、貪（むさぼ）りと怒りによって、真実を求める事をせず、ただ自分を誤魔化して生活しているだけだと、痛感します。

しかし、仏の教えに出遇っていなければ、決して自分の身の現実を振り返ることもなく、悲しみ嘆く事もなく、欲望の赴くままに好きに生き、何となく過ごしていくと思えます。楽しい事だけを追い求め、辛い事には、眼を背けていくことを繰り返し、そして死んでいく。こういう生き方を、生死輪廻（しょうじりんね）というのではないかと思います。

仏の教えはそういった迷いの繰り返しから離れる事だと思います。そして、そのような我が身を省みる眼を頂くことなのかもしれません。自分のありのままの姿を知らされることで、どのような私であっても引き受けていける世界が開かれていくのだと思えます。

このご和讃はとても厳しい言葉ですが、自分自身の事が書いてあると感じましたし、私の現実を言い当てられた気がします。そして、親鸞聖人の「煩惱具足の凡夫として生きるしかない」という悲しみ。また、悲しみの中にも、「それでも生きるのだ」という力強さを、感じる事が出来ました。